「記憶ノート」

「じゃあ、今回のテストを返すぞー」
先生の言葉に教室がざわついた。
「はーい。静かに。じゃあ、赤谷」
名前が呼ばれていく。今日返されるのは、こないだ行われた算数のテストだ。
「次、水島」
僕の名前が呼ばれた。僕が前に出て先生からテストをもらおうとすると、
「あー。水島。お前、もう５年なんだから、そろそろ九九完璧に覚えような？前より覚えたって３０点じゃなぁ」
先生は笑いながらそう言う。
「また、水島が最下位かー」
「ヤバイよな。水島。３０点って」
「水島みたいな点数だけはなりたくないわ」
「お前ら聞えるって！」
「ハハハハハハハハ！！」
教室が嗤いに包まれた。
僕も無理やり笑顔を作る。
そんな僕を見て先生が僕を叱る。
「笑い事じゃないんだぞ！？分ってるのか？」
「すいません・・・」
さっきまで先生だって・・・。そんなことわ言えずに、とっさに謝ってしまう僕の癖。
「もういい、ほら席に座れ」
僕が席に戻ると、周りの奴等が僕のテスト用紙を見ては、クスクスと嗤っていた。

手には赤字で３０点と書かれたテスト用紙。
自然と家へ帰る足が重くなる。
テスト用紙を鞄に直し、俯く。
「怒られるんだろうなぁ」
算数の掛け算を主としたテスト。
勉強しなかった訳ではない。覚えようと何度かしたが、全く覚えられる気配すらなく、その度に挫折していた。
帰らないわけにもいかず、家に帰ってきてしまった。
「た、ただいま」
玄関で小さく呟くように言った。リビングに行くと母がキッチンに立ち夕飯を作っていた。

母に気づかれないように、そっと２階の自室に戻ろうとしたが駄目だった。
「ハル。今日テスト返されたのよね？見せて」
母は僕の方を見ずに料理を作りながら言った。
「え・・・。うん」
僕は鞄からテストを出すと、母にそっと渡した。
「何これ？」
母の声色には怒りがこめられている。
「ごめんなさい」
僕は泣きそうになりながらも謝った。
「だから、何これ？って聞いてるの。本当に信じられない、こんな点数とるなんて。ちゃんと勉強してるの？」
母はテスト用紙を床に乱暴に落とすと、僕を見た。
「ごめんなさい」
「謝ったらいいの？どうしてユウみたいに出来ないの？これじゃあ中学受験なんて出来ないわよ！」
母がそう怒鳴った時、玄関のドアが開く音がした。兄が帰ってきたのだ。少しすると兄もリビングに来た。
「お帰りなさい、ユウ。すぐに夕飯作るからね」
母は笑顔で兄を出迎えた。兄は何も言わず、鞄を肩からおろし、床に落ちた僕のテストを見て「何それ」と無愛想に母に聞いた。
「あー、それね。見てよ、ユウ。ハルのテストなんだけど」
母は床に落ちたテスト用紙を拾い、兄に渡した。兄はそのテスト用紙を少し見て、鼻で嗤った。
「馬鹿じゃねぇの」
兄はそう言うとテスト用紙をくちゃくちゃに丸め、ゴミ箱に捨てた。
「あ・・・。」
「俺さ、来年高校受験なんだよ。お前見ると馬鹿になりそうだから、もう話しかけんな」
兄はそう吐き捨てて、２階の自室へ戻った。
残された母は深くため息をついた。
「お兄ちゃんの邪魔はしちゃ駄目よ。後、今回の罰として明後日の誕生日プレゼントは無しだから」
そう言うと、夕飯作りに戻った。
僕は、鞄を持ち自室に向った。

自室に入ると、鞄をほおり投げベッドに倒れこんだ。

どうして僕はこんなにも駄目なんだろう。そんなことを考えていると、抑えていた涙が溢れ出した。
泣いていても駄目なんだ。勉強しなきゃ。
僕はベッドから起き上がり、勉強机に向かった。
「・・・あれ。何これ」
勉強机には見覚えのない青いノートが置かれていた。
青いノートの表紙の右端に小さく「記憶ノート」と書かれていた。表紙をめくると、裏表紙になにやら書いてあった。
・このノートはあなたを助けるノートです。
・記憶したいことをこのノートに書き込んでください。
・このノートはなくなることはありません。
・書くスペースがなくなると自動的にノートが届きます。
と、それだけ書かれていた。
表紙と裏表紙以外は普通のノートと同じだ。
「何これ・・・。お兄ちゃんのイタズラ？」
僕は腹が立ってきた。こんな手の込んだことまでして僕を馬鹿にしたいのだろうか。もう好きにすればいい。騙されてあげるよ。僕は半分書き殴るように、そのノートに九九を一度書いた。
「こんなので・・・」
そう思い、あたまの中で九九を唱える。
２×１＝２、２×２＝４、２×３＝６・・・。
９×７＝６３、９×８＝７２、９×９＝８１.
嘘。覚えてる。何で？さっきまで覚えてなかったのに。僕はノートをちらっと見る。もしかして、これ本物？僕は今度は電卓を使って１９８×１６５＝３２６７０と、ノートに書いて、すぐにノートを閉じた。そして頭の中で、１９８×１６５＝・・・。と考える。３２６７０！
答えはすぐに出た。
「凄い！覚えてる！」
じゃあ、このノートに覚えたいことを書いていけば！
僕はとりあえず、算数の教科書を鞄から引っ張り出して、教科書の中に書いてある計算の仕方や、記号の名前、公式などを、どんどんノートに書き写していった。一度書いただけなのに全て暗記できていた。

僕は何日もかけて、ありとあらゆる教科をノートに書き写していった。ノートは一冊目に書くスペースがなくなると、次の日に古いノートの上に不思議な事に新しいノートが増えていくようだ。ノートには社会の年号や、国語の漢字、理科の生物の分類や、星座の名前。テ

ストでは、暗記していることをそのまま書いたり、暗記している公式に数字をあてはめたりするだけなので、１００点を取るのは余裕だった。
僕が１００点を取るとクラスの奴等が知ると、
「おい、水島。どうしたんだよ・・・？」
「まぐれだよな？」
「急にどうしたんだよ？お前らしくないぞ？」
と言ってきた。みんな自分より下を見て安心していたけれど、僕が上になったことでみんな次は自分が一番下になるんじゃないかって不安で焦っているんだ。それが僕はとてもいい気味だった。今まで散々馬鹿にされてきたのだ。それくらい思っても罰は当たらない。
そして何回かテストで１００点を連続で取ると、担任の先生に職員室に呼ばれた。
「失礼します」
職員室に入ると、担任の先生がこちらを睨みながら、専用のデスクの前に座っていた。
「来い。水島」
言われた通りに先生の前まで行く。
「なんですか・・・？」
「お前、カンニングしてるだろう」
こう言われるのは想定内だったが、とても腹が立った。
「していません。どうしてそんなこと言うんですか？」
「クラスの奴が教えてくれたんだよ。おかしいと思ったよ最近１００点しか取らないから」
なるほど。クラスの誰かが嘘をついて僕を陥れようとしているんだ。
「していません。きっとそれは嘘ですよ。大体証拠もないじゃないですか」
「こんなことをしていて恥ずかしくないのか！？」
先生が僕を怒鳴りつける。でも、僕はもう前みたいに謝ったりはしない。
「だから、していません。では、僕は忙しいので失礼します」
僕は先生に一礼すると職員室を出た。後ろから「いつかバレるぞ！」と脅してくる先生の声は無視した。

家に帰るとお母さんにテストを渡した。
「凄いわ！ハル！私は信じてたわよ！」
そう言うと、ギュっと僕を抱きしめた。最近１００点を取り続けると、コロッとお母さんは態度を変えた。お兄ちゃんの態度は相変わらずだったが、僕には分かる。お兄ちゃんは焦っているのだ、クラスの奴等のように。
「そうそう、遅れてごめんね？誕生日プレゼント！」
お母さんは嬉しそうに僕に大きなカラフルな袋を渡した。僕の本当の誕生日は先週。その時は、プレゼントも祝いの言葉さへも無かったのに。僕は怒りでいっぱいだった。僕はその袋

を思いっきり投げて、そして大きな声で「いらない！」と叫んで、２階へあがった。
そして机の上に置いていたノートをギュッと抱きしめベッドに倒れこんだ。嫌いだ。クラスの奴等も、先生も、お母さんも、お兄ちゃんも、みんな嫌いだ。僕を救ってくれるのはこのノートだけ。これさえあれば、僕は何もいらないんだ。

中学受験。僕はもちろんトップレベルの中学校を受験した。小学校の頃から中学校の教科書を買い、ノートに書き写してきたので中学校の範囲なんて楽勝だった僕は余裕で合格することが出来た。母はそんな僕に更に甘くなった。もう一切怒られないし、冷たくされない。
それとは正反対に兄が志望校を落ちた。スベリ止めの高校に入学する事になったがなったが、やはりレベルは一気に落ちてしまう。母の兄への態度が少し変わった。兄が中学校に行っていた時と比べると厳しいとまではいかないが、前のように甘くは無くなった。それから兄はずっと部屋に引きこもりがちになったが、僕にはそんなの関係なかった
中学校では、もちろん誰も僕を馬鹿にしなかった。逆にみんな僕に憧れを抱いてくれていた。
「ハル君って凄いよね！いつもテスト順位１位だし」
「そんなことないよ」
こんなことを言われるのは日常茶飯事だ。
「きっと、たくさん努力してるんだね！私も見習わないとなぁ！」
「・・・」
努力。僕は散々辛い目にあったんだ。だから神様はあのノートを僕にくれた。だから僕は努力なんて・・・。
「ハル君？どうしたの？」
「ううん。なんでもないよ！」
そんな事、今更気にしたってしょうがない。
中学校では僕は常に一番をキープし続けた。

そして３年が過ぎ、高校受験が始まった。その時既にノートはもう５０冊を超えていた。もう、知らないことはないのではないか。と思うぐらい色んなことを記憶していた。今日、高校受験の合否の結果が届くのだ。僕が行く高校は兄が落ちて行けなかった高校だ。偶然にも兄もこの日、大学の合否が届くことになっていた。今リビングには母と僕と兄、全員が揃っていた。空気がピリピリしている。外のほうでゴトッと音がした。多分、結果が書かれた封筒がポストの中に入れられたのだろう。母は、すぐに立ち上がり玄関を出て中身を見に行った。しばらくして母は２枚の封筒を手に持ち、リビングへ戻ってきた。
母は一枚を僕に、そして一枚を兄に渡した。僕は躊躇無く封筒をあけた。中の紙には「合格」の文字が書かれている。まぁ、当たり前だ。僕が紙を見たのを見ると、母が、

「どうだった？ハル」と聞いてきた。
「合格だよ」
僕は「合格」と書かれた紙を母に見せる。母は、涙を浮かべながら、ギュと僕を抱きしめながら「すごい」とか「頑張ったね」と言い続けた。そんな中、横で兄が崩れ落ちた。手には封筒の中に入っていた紙を握り締めている。
「う・・・、あ。ああ」
そんな様子の兄を見て、母は兄が握っている紙を奪うように取った。その紙には「不合格」。そう書かれていた。
母は深いため息をついた。
「どうするのよ？浪人なんてやめてよ、みっともない。あなたが頑張らなかったからでしょ？今更後悔しても遅いわよ」
母は吐き捨てるように言った。
「俺は頑張ったんだよぉおおおおおお！！頑張ったんだ！なのに、どうして・・・。ああああああぁああああぁ」
兄は立ち上がり大声で泣き叫んだ。
僕は兄の努力を知っていた。兄が高校に入って、毎晩毎晩遅くまで勉強していたことを僕は知っている。兄は努力したけれど、落ちたのだ。僕に負けたんだ。
「みっともないから泣かないで！ハルを見習いなさい！」
僕は合格したんだ。兄と違って、僕は・・・。
それから兄は家を出た。仕事を見つけて１人暮らしをするらしい。兄は家を出る時に僕に「今までごめんな。母さんを頼む」そう言った。母は兄のことを、落ちるところまで落ちた。なんて言うけれど、僕は何故だか、兄が羨ましいと思った。

僕が高校２年になった春。調子の良いクラスメイトの１人が話しかけてきた。
「なぁ、水島。お前さ、高校生クイズ王決定戦って番組知ってるか？」
「聞いたことはあるよ」
確か、全国の高校生の中で誰が一番博識かを決める番組だったはず。
「出ないか？お前なら絶対優勝できるって！」
「えー、そうかなぁ」
「うんうん！優勝出来るって！・・・でなぁ、もう応募しちゃった」
クラスメイトはてへっ、とポーズを決めた。勝手なことをする。これで頭がいいんだから人間見た目じゃ分からないものだ。しかし、興味がなかった訳ではない。自分がどこまで記憶しているのか知りたいと思っていたし、良い機会だ。
「いいよ。出るよ」
そして僕は、高校生クイズ王決定戦に出ることにした。

高校生クイズ王決定戦は予選で勝ち抜いた高校生２０人がありとあらゆるクイズに答え、決勝までに２０人を２人に絞る。そして、その２人は、別の日に行われる決勝戦で一対一で戦うのだ。
僕は予選でも一番で勝ち抜き、２０人の内１人となった。
クイズは流石、選ばれ抜かれた２０人だけあって結構手強く、更にテレビという緊張もあり、スムーズには勝てなかったが、最終的に決勝に行ける２人に選ばれた。
「ここで、決勝進出の２人が決定しました！！水島ハル君と、野崎マモル君です！」
司会者が高らかに言うと、会場は拍手に包まれた。
野崎マモル。僕より１つ下の高校生だ。
彼は本当にたくさんのことを暗記していて、凄く手強かった。
番組の撮影が終り、僕とマモル君は最後に決勝の撮影について打ち合わせがあるので、それまで用意してもらった楽屋で休憩となった。僕とマモル君は部屋が別々だったが、僕は少し気になりマモル君の楽屋を訪ねた。
僕がノックすると「はーい」と聞こえ、すぐにドアが開いた。
マモル君は僕の顔を見ると驚いた顔をし、
「ど、どうしたんですか？」
と聞いてきた。
「いやー、何してるかなぁ・・・。って」
マモル君はそれを聞いて楽屋に入れてくれた。
「俺は、勉強してました。でも、頑張っても水島さんには勝てない気がします」と、愛嬌のある笑顔で笑った。
彼の楽屋のテーブルの上には、たくさんの参考書と、書きかけていただろうノートが開いておいてあった。
努力してるんだ・・・。そんなの分かってたことだ。みんな努力している。していないのは・・・。
「勉強してたんだね・・・。ごめんね、邪魔しちゃって」
「いえいえ、邪魔なんてそんな。俺、頑張って水島さんに勝ちますよ！」
マモル君は笑顔で答えた。
「・・・頑張ってか。うん、僕も頑張るよ」
僕は無理やり笑顔を作り、マモル君と別れた。
僕は逃げるようにして自分の楽屋に戻った。
そして、あのノートを開けて、新しい知識を少しでも書いて記憶しようとした。しかし、考えてしまう。
みんな頑張ってる。努力している。していないのは僕だけだ。
兄は僕に勝てなかった。マモル君もきっと僕には勝てない。

二人とも死に物狂いで努力してきたのに、努力していない俺に負けるんだ。目の前が霞んだ。気づけば涙が出ていた。
分かっていたのだ。自分は、卑怯で弱いのだと。ずっとノートに頼って、逃げてばかりいたんだ。落ちた涙でノートに書いた公式が滲む。僕は・・・。

決勝のミーティングが終わった後、家に帰って、僕は今までのノートを束ねて集めた。そして決心が変わらないうちに家の庭で、ノートを全て焼いた。焼いている炎を見ると、少しでも自分の罪が許される気がして、心が安らいだ。
「全て忘れるんだ」
九九を頭の中で思い出す。２×４＝８、２×５＝１０、２×６＝・・・。駄目だ。覚えてないや。うん。これでいい。これでいいんだ。もう僕は逃げないんだ。

ノートを書いていると、家に電話がかかってきた。
「あ、もしもしマモル君？」
電話の相手は、番組の関係者からだった。
内容は、決勝の相手、水島ハルが突然棄権したというものだった。よって、僕が優勝者になって、決勝戦の予定日だった日にトロフィーを授与してくれるらしい。
「へー、ハルさん棄権したんだ」
ま、棄権してもしなくても俺が勝ってたんだけどね。
僕は、シャーペンを止め、書いていたノートを閉じた。
ノートの表紙の右端には「記憶ノート」と書かれている。
僕はそのノートをギュと抱きしめ、ベッドに倒れこむ。
これさえあれば、俺は何もいらないんだ。